
クレメンスの館

ちやこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレメンスの館

【Nコード】

N0224V

【作者名】

ちやこ

【あらすじ】

まどかからの依頼で、イギリスにある多くのケガ人や死者を出すクレメンスの館の調査をすることになった日本SPRのメンバー。だが、大学推薦の特別試験のために麻衣は不参加になってしまった。しかも、建物に入ることさえできない。このままでは調査は進まない。次々とケガ人が出る中、ナルはどうするのか。

(前書き)

英語は間違っていると思われれます。

ネタバレは考慮しておりません。

ジョンの除霊は聖書を参考にしております。

日本にいるナルに調査をお願いしたのは、木枯らしが吹き始める秋のことだったわ。

『 断る 』

そんなこと言わないでちょうだい。先方も困ってるのよ

『 大体、その程度のこと、僕がいなくてもそっちのメンバーでどうにかなるだろう？ 』

それがダメなの。予備調査に行った五人の内、一人が骨折。二人は、骨折には至らなかつたけど、重度の捻挫を負つたのよ

『 何度言われても、今は無理だ。麻衣、安原さん、原さんの三人は試験の準備で忙しいし、ぼーさんはツアー中、松崎さんは旅行中、ジョンに至っては里帰り中だ。そのため、現在、いかなる依頼も全て保留、もしくはキャンセルしている 』

その話を聞いて、何て間が悪いのかしらって思っちゃったわ。

元々、ナルは興味を持った依頼しか受けないし、学生である麻衣ちゃん、安原君達が試験の時はほとんど依頼を受けることがないものね。

そんなこと言わないで。ナルだけが頼りなのよ

『 第一、僕とリンが二人だけ行つて、どうにかなるような依頼なら、わざわざ僕に依頼をする必要はないと思いますか？ 』

ああ言えばこう言う。誰が、こんな風に育てたのかしら。

とりあえず、状況だけでも見て欲しいのよ。麻衣ちゃん達は試験が終わってから来てもらえばいいじゃない

『 ……麻衣の試験期間は二週間。今週から試験勉強のために休みだ。安原さんも同様。どんなに早くても、来月になる 』

試験が終わるのがいつかは分からないけど、長くても三週間は、待つには長過ぎるわね。

分かつたわ。じゃあ、上司命令よ。来月、イギリスに調

査に来るのよ。いいわね

「まどか　　！」

今月はダメと言うことは、来月は平気と言うこと。わたしは、来月と言う言葉を強調して、ナルの返事を待たずに電話を切ったわ。

チーフ。デイヴィス博士は何と仰ってましたか？

心配そうな顔でわたしを見る部下を、肩を叩いて大丈夫と励ましたわ。

日本のメンバーが今月はどうしても都合がつかないらしいから、来月、必ず来るように念を押しておいたわ

……デイヴィス博士なら、きつと解決できますよね？

まあ、ナルだものね

絶対とは言い切れないけど、日本メンバーの実績は、ここイギリスにあるSPRでも高い評価を得ているのよね。ただ、ナルの報告書には、絶対に麻衣ちゃんの名前が記載されていないため、麻衣ちゃんの能力どころか、存在を知る人間はごく一部なのよね。

それからわたしは、チケットを手配したんだけど……。

まどかからの電話を切られた後、僕はとりあえず今聞いた内容をリンに伝えた。

「　　来月、イギリスで調査ですか？」

「ああ。今月はみんなが忙しいと伝えると、じゃあ、来月と言うってから電話を切った」

「　　ですが、来月は確か……」

そうなんだ。麻衣は確かに今月は学校の試験には違いないが、来月のもっと大事な試験が待っていた。麻衣は僕の進めもあって、国立の大学に進むことにしたんだが、その特別試験が来月あった。

「仕方ない。今の麻衣に余計な心配は掛けたくないからな。次の調査に麻衣を外す」

「……よろしいんですか？」

「まあ、どつちにしろ、まどかが寄越すチケットの日付次第になるだろう」

「そうですね……」

それから数日後。まどかからチケットが届いた。日付は、麻衣の試験の前日だった。

さらに一週間後。先に試験を終えてバイトに出勤してきた安原さんに今回のことを伝えた。

「イギリスで調査！……来月ですか……」

「ああ。出発は六日だ。ぼーさん達には、すでに連絡して了承は取つてある」

「来月の六日と言うと、ちょうど谷山さんの試験の前日ですよ？
何でまた、そんな日に調査を？」

「僕は最初、今月は、みんなが忙しいからと断つたんだが、まどかが話も聞かずに来月なら空いているだろうと、考えたみたいなんだ。そこで、僕は麻衣に知らせずに調査に行くことにした」

「……谷山さん。怒りませんか？」

「こう言う時に調査を依頼したのはまどかなんだから、まどかには、その辺は犠牲になつてもらおう」

「……犠牲……ですか」

安原さんは微妙な顔をしていたが、この時期に麻衣に余計なことを考えさせるわけにはいかない。そこで、今回の調査のことを、麻衣に対して一切の緘口令を敷くことにした。

元々、学校の定期テストからそのまま試験の勉強に入る麻衣は、どちらにしる一ヶ月はバイトに来ることはないが、誰かが話したりしない限りは、麻衣が知ることはないはずだ。

特に安原さんは、麻衣の勉強を見ていたこともあって、普段でも相談に乗っているらしい。だから、特に安原さんに口止めしておけば、この話が漏れることはないだろう。

それに、安原さんも僕と同じ考えらしく、自分だけでなく、ぼーさん達にも口止めをしていた。そして、麻衣には一切何も知らせず、

僕はイギリスに行くことにした。

「ねえ。でも、本当に麻衣に何も言わずに来ちゃってよかったのかしら？ あの子、一人にされると不安になるんじゃないかしら」

「その点の抜かりはありません。谷山さんはオフィスの鍵をお持ちですからね。試験を終えて、バイトに来た時のためにメモは残しておきました」

「それだつたらいいんだけど……」

「松崎さんは、本当に谷山さんのお母さんみたいですね」

「ぼーずと一緒にするんじゃないわよ。アタシはお姉さんよ。おねえさん」

「だけだよお。こんな大事な時に、出発することになるなんてな。俺、うかつに喋っちまいそうだったから、麻衣に何も言えなかったんだよな」

「そう言えば、一昨日でつしやるか。麻衣さんが教会に来てはりましたよ」

「麻衣がですか？」

「そうでおます。何や、熱心に祈ってはりました」

「……そりゃあ」

「神頼みだな」

「ですわね」

「安原特製、スペシャルノートを差し上げたと言うのに、最終的に神頼みなんですわ」

「まあ、気持ちに分かるけどな。苦しい時の神頼みって言うたら」

結局、彼はこの調子でほとんど誰かしらが話している状態だった。時々、リンも会話に加わることもあったが、とにかくイギリスまでのフライトは特に何も起こらず済んだ。

それからイギリスに到着した僕らは、空港近くのホテルにその日は泊まり、翌日、まどかが運転手を一人連れて、ワンボックスカーで迎えに来た。

開けてビックリって言うのは、正にこのことを言うのかもしれないわね。

麻衣ちゃんの推薦試験。なんて、盲点だったのかしら。ナルもナルよね。教えてくれればよかったのに。

「僕は別に、麻衣の能力に頼っているわけじゃないんだが」

「でも、麻衣ちゃんが役に立つのは事実でしょ」

「……猫の手よりはまし、程度だがな」

「猫は美味しい紅茶を淹れられないし、ナルの我がままを聞いてくれるわけじゃないわ。麻衣ちゃんは猫の手どころか、普通の人間に比べたら、それ以上の存在だわ」

わたしがそう言うと、ナルが苦虫を潰したような顔をしている横で、他のみんなが頷いていたわ。リンなんか特に調査時に麻衣ちゃんが理不尽な思いをしているのを間近で見ているから、麻衣ちゃんの気持ちが分かるんでしょね。

ナルは大きく溜め息を吐いたわ。

「麻衣のことはともかく、今回の詳しい依頼内容を話してくれ」

「じゃあ、車で移動しながら説明するわね」

ナル達七人と一緒にワンボックスカーに乗り込み、わたしは調査場所までの一時間、今回の依頼内容について説明したわ。

「今回の調査場所は、通称クレメンスの館よ」

「クレメンス？ あの偏屈で有名なビクトール・クレメンスの館か？」

「元ね。今の持ち主は違うわ。とにかく、現在の持ち主が、この屋敷が古いから建て替えようとしたんだけど、ここで工事作業員の内、三人が死亡。十人が重軽傷を負っているわ」

「マジかよ」

「ほんまどすか？」

「……作業工程を怠っていたんじゃないのか？」

「そう言うと思ったわ。工事工程には、何の落ち度もないことが判明しているわ。一応、事故と言うことになったんだけど。その話を聞いた依頼人の息子が、友人達と面白半分はその屋敷で肝試しのよなことをやったらしいのよ」

「それで、何か起きたんですの？」

「起きたのよ。肝試しをしていたのは依頼人の子供も含めて男女八人。その内三人が裂傷や軽い火傷。四人が骨折。一人が複雑骨折の上、内蔵破裂で今も入院中。内臓が破裂したのが依頼人の子供で、高い所から落とされたような状態だったらしいわ」

「窓から落ちたと言うことですか？」

「建物は二階建てだし、幾らなんでも、二階の窓から落ちても複雑骨折で内臓破裂と言うのはありえないわ」

「そうでおますね。せやったら、何ですやるか？」

「それが分からないから、依頼人はSPRに依頼してきたんだけど……」

「その予備調査で、すでにケガ人が出ていると言うわけか」

「その通りよ」

わたしの説明が終わってから、日本メンバーは複雑そうな顔をしていたわ。まあ、当然よね。話だけ聞いていると、かなり手強い相手ですもの。

「まあ、行く前から心配しても仕方ありません。……ところで、ぼくは今回そのまま一緒に来てしまいました。よろしかったんでし
ようか？」

「郊外にある建物じゃないから。空港やSPRの本部よりは、図書館に近いと思うわ」

「そうなんですか」

「まどか。そんな危険な場所の調査なんて、どうやって寝泊りするのよ？」

「屋敷の隣が空き地になってるから、そこでキャンプか、キャンピングカー、もしくは十分ほど行った所に古いホテルがあるわ。まあ、

お勧めはキャンピングカーかしら」

「普通ホテルでしょ」

「イギリスのホテルは、日本よりもお風呂事情が良くないのよ」

「そう言えば聞いたことがありますわ」

ナルもリンも、日本に行った時、当たり前のようにお湯がちゃんとしてくる日本のシャワーに驚いたみたいなのよね。

それから三十分ぐらいして、調査場所に到着したわ。

「紹介するわね。今回、イギリス側から参加するのは、ピーター、アレク、ポーラの三人よ。彼らは、メカニックと霊媒師よ」

三人とも、ナルとリンは分かるわね？ メガネの青年が日本分室の事務員。他の四人が協力者よ

……チーフ。確か、メンバーは八人では？

一人、用があつて来れないみたいなのよ。残念だわ。麻衣ちゃん紅茶は絶品だったのに」

「まどか。脱線はそのぐらいにして頂けますか」
ナルに睨まれちゃったわ。

「ごめんなさい。あ、言うのを忘れるところだったわ。彼らは、あんまり日本語が得意ではないんだけど……」

ナルやリン、ジョンはともかく、安原君は平気よね。他の三人はどうかしら」

「アタシは海外旅行にもよく行ってるから、英語ぐらい話せるわ」

「あたくしは少しでしたら」

「俺も日常会話程度だったら」

「それだったら大丈夫だと思うわ」

イギリスメンバーのことも考えて、ここからはほとんど英語での会話になったわ。

まどかの話からすると、中に入るのはかなり危険だな……。この中に、実際、建物に入った者はいるか？

三人ともです

……ポーラは確か、霊媒師だったな。建物内で何か気付いたこと

はあるか？

えっと……。多分ですけど、女性の姿が見えました。それに、男の人の姿も

ナルは、ポーラの話聞いて、原さんに尋ねたわ。

「原さん。ここから、その様子は確認できますか？」

「少し離れていますから、分かりませんわ。……ですけど、あの建物から強い感情が放出されていますわ」

「強い感情ですか……」

屋敷を壊そうとすれば死に、中に入っただけで大ケガを負う……。まどか。建物の周囲や庭に入っただけで、ケガをした人物はいるか？

そう言う話は聞いてないわ

そうか。なら、とりあえず屋敷の周囲や庭にカメラを置いて、様子を見よう。……松崎さん。用心のために護符をお願いします

「O・K・まどか。筆と紙はあるかしら？」

「こっちよ」

わたしは綾子を、別のキャンピングカーの一つに案内したわ。

「事前にナルに頼まれた物は、大体用意しておいたわ」

「……それにしても、聞いているとすごい屋敷よね」

「まあね。一応この後、安原君を連れて、近くの図書館に行つて来るわ」

「正直言うと、まさか、イギリスに調査に来る日があるとは思わなかったわ。……一番驚いたのはナルね。まさか、麻衣がないのに調査を決行するとは思わなかったわ」

「それって、わたしのせいなのよ。まさか、麻衣ちゃんにそんな重大な用事があるなんて知らなかったから。チケットを送っちゃったのよ」

「ま、安原君が何だか色々準備して来たみたいだけどね」

綾子はわたしと話している間にも、硯で墨を磨っていたわ。麻衣ちゃんの話では、綾子はちょっと特殊な能力者みたいなのよね。

「じゃあ、わたしは行くわね」
それから、安原君と二人で近くの図書館に向かったわ。

イギリスでは七日の正午を迎えた頃、日本では同日の夜だった。
前日の出発前に、渋谷サイキック・リサーチのメンバーは麻衣に
励ましのメールなどを送ったが、なぜか当日、それがなかったのが
麻衣は気になっていた。

とりあえず、一日目の筆記試験を終えて、夕方、事務所の方に連
絡を入れても、留守電になっているだけで誰も電話に出ることはな
かった。

「おつかしいな。……まどかさんから急な依頼でも入ったのかな」
ナルが圧力に負けて依頼を受ける時は、大抵、ナルの上司である
まどかからの依頼だった。

「……とりあえず明日、試験が終わってから、事務所に行ってみ
よう。……それとも、あたしは必要ないってことなのかな……」

麻衣は微妙な不安を抱えたまま眠りに就いた。だけど、その夢の
中にジーンが現れた。

「ジーン！ どうしたの？ ジーンが起きてるなんて、やっぱり調
査なの？」

「うん。……麻衣に心配掛けたくなくて、みんなで口裏を合わせて
いるんだよ」

「そうなの？」

「だから、僕も黙っていようって思ったんだけどね。知らないと、
麻衣が気になって眠れないみたいだから」

「そうだね。すっごく気になる」

「麻衣ならきつと、そう言うと思ったよ。でも、教えて上げない」
「何で？」

「ナルの望みは、無事に麻衣が試験を終えられるようにすることだ
から」

「……試験って言っても、明日は面接だけだよ」

「それでもダメだよ。我がまま言っていると、僕が麻衣に憑依して勝手に試験を受けに行っちゃおうかな」

ジーンのからかいに、麻衣は半分本気で、

（それだけは、ヤメて）

と、思っていた。

「憑依して試験に行くのは冗談だけだね。でも、本当に面接は頑張ってるね」

「……じゃあ、あたしが明日の面接で緊張しないように、今だけはナルのフリして言ってくれないかな」

麻衣のその言葉にジーンは苦笑した。

「頑張れ、麻衣」

ジーンは、麻衣の額に軽くキスをした。

「……………」

翌日。麻衣はどうか面接を終えた。それから急いで、渋谷サイキック・リサーチの事務所に向かった。

事務所の入り口は、Closeの札が掛かっていた。麻衣は、カバンから事務所の鍵を取り出すと、開けて中に入った。誰かがいた様子のないオフィス。麻衣にとっては一ヶ月ぶりだが、一ヶ月前とほとんど変わり映えはなかった。そんな中、麻衣は自分のデスクの上に通の手紙があるのを見つけた。字を見ると、安原さんが書いたものだと分かった。

「谷山さんへ。谷山さんがこの手紙をお読みなっている頃、恐らくぼくらはイギリスにいると思います。なぜならば、森さんの依頼でイギリスにある屋敷の調査に行くことになりました。出発が谷山さんの大事な試験の前日でしたので、ご心配をお掛けしたくないと言う所長の配慮により、今まで隠しておきました。もし、そちらで何かお分かりになった場合、もしくは、谷山さんが後から調査に参加される場合は、イギリスのSPRの方にご連絡下さい。安原より」

麻衣は手紙の内容を読んで、連絡をしようと思った。国際電話な

ど掛けたことはないが、掛かって来たのを受けたことは何度かあるから大丈夫だろうと思った。

『Hello. This is a Society for Psychological Research.』

「あ、あの日本語が出来る人は……」

『Your're Japanese? Can you wait for a little.』

少し待てと言われて、しばらく待っていると、

『こんにちは。心霊調査協会にご用でしょうか?』

と、日本語のスタッフが出た。

「日本の渋谷サイキック・リサーチの者ですが、こちらのスタッフと協力者がそちらに行っているはずなんです……」

『渋谷サイキック……。確か、デイヴィス博士の所。ええ。確かにこちらにきています。現在は調査のため、本部にはいませんが、責任者に連絡いたしましょうか?』

「お願いできますか?」

『失礼ですが、お名前は?』

「谷山麻衣です。ナルか、まどかさんにそう言っていただければ分かると思います」

『分かりました。では、折り返し、そちらに連絡を差し上げます』

「お願いします」

麻衣はどうか電話を切った。後は、まどかかナルからの連絡を待つだけである。

徹夜明けで仮眠を取っていると、わたしの携帯が鳴ったみたい。

こんな朝早くから電話なんて、何の用?

『朝早くって、もう八時よ。実はたった今、日本から谷山麻衣って名乗る子から電話があったのよ』

え！ 本当に！

わたしは、その名前を聞いてすぐに飛び起きたわ。

『ええ。……ねえ。彼女、デイヴィス博士のこと、ナルって呼んでたけど……』

それよりも、すぐに麻衣ちゃんに連絡しないと

彼女の話最後まで聞かず、着替え直すと、ベース代わりにしているテントに向かったわ。

あれ？ チーフ。仮眠に入ったんじゃないんですか？

緊急なのよ。ナル。麻衣ちゃんからSPRの本部の方に連絡が来たそうよ

麻衣から？ それで、麻衣は何だった？

まだ、こっちからは連絡を入れていないわ

ですが、連絡が来たと言うことは、谷山さんの試験は終わったんですね

時間からすれば、恐らくそうだろう

とりあえず、麻衣ちゃんに電話しないとね

わたしは、日本の渋谷サイキック・リサーチに電話を掛けたわ。

『はい。渋谷サイキック・リサーチです』

「麻衣ちゃん？ わたしよ。まどか」

『まどかさん？ よかったです。連絡が就いて。なかなか電話が来ないから、何かあったのかと思っちゃいました』

「ごめんなさいね」

わたしが麻衣ちゃんと話していると、横からナルに携帯を引っ手繰られたわ。

「ちよつと！」

怒るわたしを無視して、ナルは麻衣ちゃんと喋り始めたわ。

「麻衣。連絡をして来たと言うことは、何かしらの情報を得たか、調査に参加する気があると言うことなんだな？ は？ ジーン

が夢で？ 分かった。 ああ。チケットの方は早急にこちらで手

配する」

ナルは電話を切ると、携帯をわたしに返したわ。

「まどか。麻衣がこちらに来ることになった。チケットを手配してくれ」

「分かったわ。……それにしても、わたし、もうちょっと麻衣ちゃんと話したかったのに」

わたしがナルに文句を言っていると、アレクとポーラが不思議そうに尋ねてきたのよね。

あの……チーフ。先ほどデイヴィス博士が仰ったジーンって、博士のご兄弟のユージン・デイヴィスのことですか？
えっと……

麻衣ちゃんとジーンのこととは秘密なのよね。

ジーンは三年前に亡くなっているのよ。アレクったら、単なる聞き間違いよ

でもさあ……

とにかく、新しいメンバーが加わることになるから、わたしはチケットの手配をして来るわね

とりあえず二人をはぐらかして、その場を離れたわ。

残念ながら、その日すぐのチケットは取れなかったんだけど、麻衣ちゃんも二日後には来れるわよね。

次の日。屋敷の周りにカメラを設置しても、それほど反応がなかったから、今度は窓や玄関口からカメラやマイクを設置することになったのよね。

「屋敷の外は何もなかったけど、本当に大丈夫なのかね」

「どうでしょうね」

滝川さん、安原君、原さんの三人が空き地の反対側から、ジョン、ピーター、ポーラの三人が空き地側の窓を少し開けて、中にカメラやマイクを設置しようとしたらしいんだけど、窓ガラスが割れたりして大変だったのよね。

「ちよっとー。真砂子ってば女の子なのに、顔に傷付けちゃって」

「すみません。庇いきれなくて」

「安原さんは悪くありませんわ。あたくしの反応が遅かったただけですもの」

「まどか。そっちはどう？」

「こっちも満身創痍ってとこだわ」

「すんまへん。ボクが至らへんよって」

ピーターは二回目のケガなのよね。滝川さんは傷が深かったから、リンが病院まで連れて行ったわ。

ナル。このままだと、麻衣ちゃんが到着する前にみんなケガをして、調査続行は不可能になってしまっわ

……そんな危険な場所の調査を依頼したのは、どこの誰でしたか？

SPR内での日本メンバーの実績は、高く評価されているのよ。でも、結局は日本国内に限ったことだから、この調査が成功すれば、ナルも日本にいやすくなるんじゃないかと思って

僕はちゃんと、日本で結果を出している。それに、本部メンバーが対処すべき事項じゃないのか？

……チーフ。デイヴィス博士は、私達が至らないから怒っているんでしょうか？

ポーラが不安そうな顔をしていたわ。今回はケガがなかったとは言え、彼女は以前の予備調査でケガをしているわけだし、今回だつて、目の前でピーターがケガをする瞬間を目撃しているものね。精神的不安は誰よりも大きいわね。

安原さんやまどかの調査でも、この屋敷がなぜ、このような状態になったのか分からないと言っし……。今までの屋敷の持ち主も全員があやふやだ

もう一度、屋敷の持ち主を辿ってみるわ

……できることなら、安原さんも連れて行った方がいいと思うがナルも安原君を頼りにしているけど、彼も縫うほどではないけど、ケガを負っているものね。

様子を見てから連れて行くわ

安原君は切り傷だらけだったんだけど、わたしと一緒に調査の洗い直しをしてくれるって言ってくれたのよね。

「森さん。ぼく、思ったんですけど、これだけの幽霊屋敷なんですから、絶対にどこかに記録が残っていると思うんです。ですから、SPRの本部でも、昔、調査をしたことがあるかもしれないせん」

「それは、気付かなかったわ。じゃあ、一度、本部の方に行って調べてみましょう」

「それと、この町の小さな図書館にはなくても、大きな図書館になら情報があると思うんで、ぼくはそちらの方を調べますね」

安原君はもつと大きな図書館に向かい、わたしは病院から戻って来たリンに頼んで、本部まで連れて行ってもらったわ。

まどかから送られて来たチケットの出発日は十日。麻衣は学校の先生に届けを出して、出発の準備を整えていた。その手には黒い携帯が。

海外で使用できる携帯を持っていない麻衣のために、ナルがオフイスに置いてある自分の携帯を使っていいと言ってくれたのだ。

朝の十時フライトの飛行機に乗り、麻衣は乗り換えを一回して、十六時間掛けてイギリスへと向かった。初めての海外旅行が一人で、しかもイギリスに行くことになるとは思ってもいなかっただろう。

麻衣は飛行機の中で、ゾーンから様々情報を見せられた。

神様。どうか、私達に子供を授けて下さい

アンダーソン夫妻は結婚して十年経つが、一向に子供に恵まれなかった。熱心なクリスチャンだった夫妻は、毎日のように教会に通い、子供を授けてくれるようにお祈りをした。

そんなある日のこと。妻が夢の中で一人の人物に出会った。

いつも熱心なお前達に、子供を授けよう

と、その人物は言った。妻は、それを聞いて、夢の中の人物を神だと思った。

あなた。昨夜、夢の中に神様が現れて、私達に子供を授けて下さると仰つてくれたのよ

本当かい？　それが本当なら、来年にはこの手に子供を抱けるかもしれないんだね

ええ、その通りよ。楽しみだわ

楽しみだね

それからほどなくして妻の妊娠が分かり、翌年の春には夫婦の間には男の子が誕生した。だが、アンダーソン夫妻の悲劇はこの時から始まった。

先ず、異変に気付いたのは母親のローラだった。赤ん坊に食事を与えようとすると、いつの間にかすでに赤ん坊が一人で食事をしてるのだ。

(……これってPK?)

過去視を見ながら、麻衣は以前、リンから聞いたナルの話を出した。

『ナルは小さい頃、ポルターガイストを起こす子供でした。麻衣には、目の前で繰り広げられている過去がいつの時代かは分からないが、服装から考えると現代でないことは確かだった。中世とまでは行かないけれど、最低でも百年ぐらい前ではないかと思われた。』

今でこそ、多少、認知度は上がったが、昔の人から見ればPKが起こす現象は悪魔の仕業にしか見えなかつただろう。

そして、アンダーソン夫妻は、その頃できたばかりの不可思議な現象を研究する機関であるSPRに依頼をした。だが、SPRはその現象をただの悪魔憑きが起こす現象として、エクソシストを派遣した。

エクソシストは悪魔祓いに失敗。さらに運の悪いことに、エクソシストに恨みを抱いている悪魔が、無垢な赤ん坊に取り憑いてしまったのだ

サイキックを持つ赤ん坊は悪魔に取り憑かれたまま成長した。

夫婦は、子供にこれ以上罪を重ねて欲しくないと、子供を自らの手で殺し、そして、夫妻もその後を追った。

麻衣は涙が止まらなかった。

「どうして……。誰も悪いわけじゃないのに……」

「アンダーソン夫妻は、悲劇の原因になったSPRとエクソシストを恨んでいるんだ。でも、夫妻も悪魔に囚われ続けているんだ。麻衣。彼らを助けて上げて」

「……でも、どうすればいいの？ 中に入ろうとしただけで攻撃してくるんでしょ？」

「彼は、人に対してだけしか攻撃しないんだ」

「つまり、幽体離脱した状態だったら平気ってこと？」

「うん。僕が彼らの情報を引き出すことが出来たのは、僕が幽霊だからだ。……。それと、危険かもしれないけど、屋敷にある物を一つだけ持ち出して、ナルにサイコメトリしてもらいたいんだ」

ジーンの言葉に、麻衣は眉を顰めた。

「死んだ人の追体験をすることになるからね。危険だって言うのは分かっている。でも、悪魔が何者なのか分からないことにはジョンでも難しいと思うんだ。悪魔祓いをするには」

「悪魔が全ての要ってことだね」

「うん。その通りだ。もうすぐ飛行機が到着する。イギリスに到着したら、また会おう」

麻衣は目を覚ました。窓の外を見ると、すでにイギリスの空の下を飛んでいた。

十日の夕方になって、麻衣から到着したとの連絡があった。

リンがちょうどまどかと安原さんの一緒に出払っていたし、ピーターはケガ、アレクはリンの代わりにモニターをチェックしていたので、仕方なく僕が麻衣を空港まで迎えに行くことにした。

「麻衣が到着したらいい。僕は迎えに行つて来るから、まどか達が

戻ったら伝えてくれ」

「マイって誰？」

ボク達の仲間の一人です。用があつて、遅れて来たんです

ジョンや滝川達のようにデイヴィス博士の認めた人間なのね。是非、会つてみたいわ

ポーラの言葉に、ジョンはどう答えていいのか分からないようだった。彼は、ぼーさん同様に僕の論文を読んでいるようだから、僕が論文などで麻衣をどう言う立場に置いているのか知っているのだから。

「とりあえずジョン、この場を頼む」

「分かりました」

ジョンは僕と同じく英語が母国語であることもあつて、比較的イギリスメンバーといることが多い。ぼーさんも松崎さんも原さんも、人並み程度には話せると言つても、やはり、ずっと英語で会話するのは面倒な部分も多いのだろう。

空港に向かうと、麻衣が僕の顔を見るなり安心したような顔をしていた。

「どこに行つても外国人だらけなんだもん」

「外国に来たんだから当たり前だ」

「それにさ、こっちのメンバーの人が迎えに来たらどうしようかと思つちやつたんだ」

「リンが、まどかと安原さんと一緒に出掛けていて、手が空いているのが僕しかいなかったんだ」

「ぼーさんは？」

「ぼーさんはケガをしたし、そもそも、イギリスでは運転できないだろう」

「あ、そつか。国際免許が必要なんだよね。……あれ？ そうするとナルは免許持つてるってこと？」

「当然だろう。いくら僕でも、無免許運転するほど無謀じゃない」

「……ジーンなら、やったことありそうだよな」

「まあな。それよりも、夢の方は見たか？」

「あ、うん。ジーンが見せてくれた」

「そうか。じゃあ、着いたら詳しく話してくれ」

「了解。……あ、この携帯、返した方がいいのかな？」

「調査の間は持つている。連絡には不可欠だからな」

「じゃあ、日本に帰るまで借りておくね」

ベース代わりの空き地に到着すると、麻衣は少々驚いていた。空き地には簡易テントが四つ。一つはベース用、残り三つが宿泊用。大型のキャンピングカーが三台、機材運搬用のワンボックスカーと、今はないが普通車が一台が置かれていた。

僕が麻衣を迎えに行くのに使ったのは、機材運搬用のワンボックスカーだった。

「……あたし、キャンピングカーって初めて見るよ」

「それはともかく、とりあえずお茶を淹れてくれ」

「はい」

お茶を淹れるために、屈んだ麻衣の胸元から不意に何かが光った。

「麻衣。それは？」

「それ？」

「首から何か提げているだろう」

「十字架のこと？ 以前、ジョンに貰った物だよ。ほら、調査先がイギリスだから、ぼーさんのお守りよりも、こっちの方が効くかなって思っつけて付けて来たの」

まあ、麻衣の言い分が分からなくもないか。

お茶を飲んだ後、全員が揃ってから、僕らは麻衣の詳しい話を聞くことにしたのだが、一つだけ問題があった。麻衣は英語が得意ではないと言うことだ。

麻衣は、原さん、ぼーさん、安原さんのケガを見るなり驚いていた。

「三人とも、どーしたの！ そのケガ？」

「窓からカメラやマイクを設置しようとして、やられたんだ」

「真砂子と安原さんも？」

「安原さんは、あたくしを庇って下さったんですわ」

「庇い切れなくて、原さんの可愛らしいお顔にケガを負わせてしまいました」

「……麻衣。それよりも話を始めてくれ」

イギリスメンバーには後から説明すると言い、その場に残るかどうかは彼らに判断させて、麻衣の話を聞いた。

「……ってことなんだけど、やっぱり危険だよな？」

「そうですね。悪魔憑きの少年をサイコメトリするのは、かなりの危険が伴いますね」

「ボクも反対でおますね。悪魔被いには、悪魔が誰であるか知る必要がありますが、そのために渋谷さんが辛い思いをしはる必要はありませんです」

「それにしても麻衣ったら、飛行機の中でずっと寝てたんですね」

「だって、することないんだもん。それに、あたしは遅れて来たわけだから、早く情報が手に入った方がいいと思って」

「それにしても、谷山さんの話でようやく調査が展開しそうですね」

「どう言うことですか？」

「実はですね。この建物、これだけの幽霊屋敷であるにも拘らず、ほとんど調べられなかったんです。SPRの本部にも記録が残ってなくて、暗礁に乗り上げていた所だったんですよ」

「そうなのよ。だから、麻衣ちゃんに来てくれて、本当によかったわ」

「この屋敷に百年ほど前に住んでいたのは、ブライト・アンダーソンとローラ・アンダーソン夫妻なんですよね」

「うん。子供の名前はアレクサンドルだったかな」

麻衣がそう言うと、一人の人物に注目が集まった。

それは、予備調査でこの屋敷に入っていながら、唯一ケガをしなかった人物でもある。イギリスメンバーの一人、アレクだった。

麻衣はなぜ、彼が注目されているのか分からないようだ。

イギリスメンバーへの説明はまどかに任せて、外はまだ明るい
問題は、これから夜になると言う時間帯のため、作業は明日になっ
た。

わたしは、麻衣ちゃんの話でイギリスメンバーの三人に話したわ。
チーフ。その話、本当に信用できるんですか？

アレクの言うとおりです。それに、彼女は何者なんですか？ デ
イヴィス博士は、随分と彼女を信用しているようだけど

……麻衣ちゃんの話の信義はどうあれ、ここでの責任者はナルに
なっているわ。ナルが彼女の話をして調査を進める限り、それに
従うのがルールだわ

話を聞いていたポーラは、麻衣ちゃんの話の全容を信じ切れな
いみたいだけど、霊媒師である彼女には、麻衣ちゃんの話に出てきた
若い夫妻と言うのを一度、目撃しているのよね。

彼女の話の全てを信じることはできませんし、彼女自身を信用する
のは無理があります。だけど、私も二人の霊を見ているし、彼らが
アレクの名前に反応したのを知っています……

どんなに優秀な相手でも、すぐにお互いが信用するのは無理があ
るわね

調査開始から五日目。

わたしと安原君は、昨日の麻衣ちゃんの話の洗い直すために再び
情報収集に向かったわ。SPRが正式に依頼を受けていないのなら、
情報が残っているはずがないわね。

「森さん。ここ、見て下さい」

安原君がそう言いながら、古い新聞の記事を見せてきたわ。

「ほら。「アンダーソン邸にて、ジャクソン神父がアレクサンドル
君の悪魔祓いに失敗」って書いてありますよね。谷山さんの話には
神父の名前は出てきませんでしたが、家の名前も、子供の名前も一
致しますね」

「そうね。もう少し詳しく調べてみましょう」

「そうですね」

「わたしは、あの屋敷を建てた人物を洗い直して、出来ることなら設計図も手に入れたいわね。安原君は、その事件について詳しく調べてくれるかしら」

「分かりました。……それにしても、建物の中に入れない調査なんて考えてもみませんでした」

「建物のない場所の調査もあることにはあるけど、今回のケースはわたしも初めてだわ」

「……そう言えば気付いていらっしやいましたか？ 所長つてば、谷山さんが来た途端、顔付きが変わったんですよ」

「あ、安原君もやっぱりそう思った？ 麻衣ちゃんの紅茶が飲めるからなのか、調査が進展するからなのか、単純に麻衣ちゃんがいるからなのかは分からないけど、それまでのナルのイライラがなくなってたわね」

わたしの言葉に、安原君は少し苦笑していたわ。

僕達から遅れること五日。麻衣が昨日、ようやくイギリスに到着した。

麻衣は飛行機内で見た夢について話したのだが、その内容は僕の予想をはるかに超えていた。

サイキックを持った子供が悪魔憑きになってしまい、それを少年の両親が殺した後、両親も自殺したと言う話だった。麻衣の話では、ジーンは僕にサイコメトリして、少年に憑いている悪魔を調べて欲しいと言っていたらしい。

その麻衣に幽体離脱で中の様子を見て来るように言ったのだが、麻衣は十六時間に及ぶ飛行機移動と、時差ボケにより昨日から一睡もせずに起きていた。

「麻衣」。まだ、眠くならんのか？」

「昨日十六時間も寝ちゃったから……」

「普段、寝てばかりいるくせに、いざと言う時は眠れないのか？」

「すみませんね。……それに眠くならないのは、多分、ジーンからのコンタクトがないせいだと思うんだよね。何かするにしても、途中参加でほとんどすることないしね」

「じゃあ、疲れて眠れるように食事の支度、手伝いなさいよ」

松崎さんに昼食の手伝いをさせられた後、食事を取り、お腹がいっぱいになった頃、麻衣はようやく眠れるだけ落ち着いてきたようだった。

話し合いの結果、麻衣の幽体離脱の様子を僕がサイコメトリすることになった。

宿泊場所であるキャンピングカーのベッドに麻衣は横になった。

「じゃあ、横になれ。僕がトランス状態に誘導するから」

「ん……」

麻衣は、ほつといてもすでに眠そうだ。

僕は麻衣の手を取った。僕の言葉に誘導されるかのように、麻衣は眠りに就いた。幽体離脱した麻衣は、屋敷の周りを一周しているようだ。

ポーラが幽体離脱した麻衣に気付いたようだが、麻衣はそれに気付かず、屋敷の中に入った。

屋敷の中はかなりの荒れようだった。

『うわー。どのくらい、人が入ってないのかな……』

クモの巣がそこらじゅうに付いていた。埃も溜まり、恐らくアンダーソン夫妻が亡くなってから、誰もこの家にまともに入った人間はいないのだろう。

『えーと……。子供部屋は……』

麻衣はどうやら子供部屋を探しているようだ。二階に向かった麻衣は、ある部屋で肖像画を見つけた。どうやら、この肖像画の男女がアンダーソン夫妻らしいな。

これだけ屋敷内を回っても、麻衣に誰も近付こうとしない。二階

の一番奥の部屋に近付くと、ジーンが現れて、麻衣を引き止めた。

『ジーン』

『麻衣。今はまだ、この先に行かない方がいい』

『どう言うこと？』

『あの男の子の霊が悪魔に捕らえられているんだ。こっちに来て。

今は、アンダーソン夫妻を助けよう。彼らを助ければ、屋敷内に入るのは相変わらず危険は伴うけど、いきなり入って攻撃される心配は減るはずだ』

『そうなの？』

『うん。……それとね。情報は少ないけど、麻衣に彼らを浄霊して欲しいんだ。彼らは、一階の玄関の辺りにいるよ』

『分かった。頑張るね』

麻衣は気合いを入れているようだった。ジーンはそんな麻衣の様子に苦笑していた。僕は、普段この二人がどう言う状況で会話をしているのかを知った。

玄関に向かった麻衣は、アンダーソン夫妻の霊を見つけた。麻衣はかなりの時間を掛けて、アンダーソン夫妻を説得して浄霊した。

ただ、浄霊に大分消耗したのか、麻衣は幽体離脱から戻って来た。麻衣の手を離して時間を見ると、すでに夕方の方のようだった。また、夜が眠れないのもどうかと思い、とりあえず麻衣を起こすことにした。

「麻衣。起きろ」

「ん〜」

麻衣の目が薄っすらと開いた。

「…………ナル…………」

麻衣は僕の顔を見るなり、締まりのない顔で笑った。

「アンダーソン夫妻の浄霊に成功したよ」

「見てたから知ってる。それよりも、このまま寝ると、夜眠れなくなるぞ」

「分かった。起きるね」

麻衣はそう言いながら、ベッドから起き上がった。

「ところで、ジーンが夫妻が浄霊できれば屋敷に入っても平気だと言っていたが、今までの攻撃は夫妻がしていたと言うことか？」

「多分そうなんじゃないかな。アンダーソン夫妻は一階にずっといたみたいだしね。ただ、二階の奥の部屋は危険かな。それに、寝泊りするのも、あの屋敷内の様子じゃ無理だと思う」

「百年近く人が住んでいないんだ。無理があるだろう」
ベースに戻ると、ちょうどまどか達が戻って来ていた。

麻衣ちゃんのおかげで、今回はかなり詳しく調べることが出来たわ。とりあえず、分かったのはこの屋敷を建てたのはどうやら、麻衣ちゃんが言っていたアンダーソン夫妻みたいね。彼らは事業で成功したみたいなんだけど、子供を殺して自殺後、この屋敷は妻の口ーラの弟夫妻の物になっているわ。彼らはこの屋敷には住まずに、その後、かなりの数の持ち主に転々としているみたい

チーフ。この屋敷に住もうとした人間はいなかったんですか？

いなかったわけじゃないみたいだけど、入るだけでケガを負わせるんなら、誰も住もうとは思わないでしょうね。過去にこの屋敷を壊そうとしたことが三度、放火されそうになったことや、燃やして壊そうとしたことが十五件あったそうよ。ただ、いずれもそれなりに被害が出ているわ

燃やす時も被害が出ていると言うことは、炎による浄化は無理と言うことですか

恐らくそうだと思うわ。わたしからは以上よ

じゃあ、次はぼくですね。谷山さんの仰っていた事件ですが、百年以上前の新聞のデータバンクに載っていました。こちらがその記事のコピーです

安原さんがそう言いながら、テーブルの上に新聞記事のコピーを置いた。麻衣は何気に見ていたが、英語が読めないので内容は把握できていないだろう。それに、先ほどからジョンに通訳してもらっているようだし。

「アンダーソン邸にて、ジャクソン神父がアレクサンドル君の悪魔被いに失敗」って書かれているんです。当時、宗教の力はまだ根強く、また、魔女狩りなどの影響も色濃く残っている時代でしたので、悪魔憑きになってしまうと、家族まで悪魔憑きや魔女の仲間と見なされたんですね。こちらがその記事から三年後の記事です

そこには、ジャクソン神父怪死の文字があつた。昔の新聞記事なので画像は不鮮明だが、かなりひどい状態で亡くなっていることが分かる。

そして、これがアンダーソン夫妻が亡くなられた時の物です。彼らの遺体は、夫妻が亡くなられた後に、この家の持ち主になったローラ・アンダーソンの弟によって葬られています。ですが、変事が起きるようになるのはそれからしばらく経ってからですね

SPRの方にも、かなりの初期のファイルにこの屋敷のことが載っていたらしい。

それから、完全に暗くなる前に屋敷の一階にカメラを設置することにした。

「……ほんとに入って大丈夫なんか？」

「ジーンは、一階なら大丈夫だって言ってたよ」

「だけどなー」

「心配なんだつたら、あたしが先に行くけど」

「ま、待て！　いくら俺でも、女の子を先に行かせられんでしょう」

ポーラ。霊の気配はあるか？

ありません

「よし、入ろう」

麻衣とぼーさんの会話を無視して、僕は玄関の扉を開けた。かなりの埃だったが、物が落下してくるとか、飛んでくると言った現象は起きなかった。

「……平気……みたいだな」

「ほーら。言ったとおりでしょ」

「そーだな。とりあえず、ちゃっっちゃとカメラやマイクを設置すん

ぞ」

「それにしても、いる場所が分かってんのに、一階にカメラを置く必要があるの？」

「何も出ないとは限らないだろ」

「それもそっか」

空き地から屋敷内までは微妙に離れているため、屋敷の周りに置いてあったカメラやマイクを運び入れた。

屋敷内にカメラを設置し終わって、ベースに戻ろうとした時、麻衣はポーラに呼び止められた。

あなた、デイヴィス博士の何なの？

「えーと……」

ドクター・デイヴィスと言う言葉は聞き取れたけれど、麻衣は英語は単語ぐらいしか分からない。

さつき、幽霊の姿をしたあなたを見たわ。幽体離脱できるのね。だから、デイヴィス博士に協力しているのよね

言っている言葉が分からなくて、麻衣が返事をしないでいると、ポーラは怒ったように行ってしまった。

日本人って、本当に大人しいのね。まあ、チーフやあなた以外の他の人は別みただけ

ポーラが立ち去った後、麻衣は彼女は一体何を話していたのかと思っただ。

「……何が言いたかったのかな？」

調査開始から六日目。屋敷内に設置できたカメラには、かなりのいい映像が撮れていた。

「アッって、おもちゃをもらって喜ぶ子供に似ているよね」

「そうですわね」

「あら。どちらかと言つと、お菓子を与えられて喜ぶ子供にも似ているわよ」

「どっちにしろ、ナルが喜ぶのは極上の心霊現象が見れた時だけだよね」

「そーね」

「三人とも、所長に睨まれていますよ」

僕が気付いて睨み付けているのを、安原さんが気付いたようだったが、麻衣達はどこ吹く風だった。

「今更、ナルの視線なんか痛くも痒くもないわよ」

「その通りですわ」

「その意見には賛成だけど、あたしは二人と違って部下だからね。

……お茶、淹れて来ようかな」

麻衣はそう言つと、さつさと逃げた。

今、ジョンに悪魔祓いの準備をしてもらつていた。ジョンも、幽霊に取り憑いている悪魔を除霊するのは初めてだろう。

それから、麻衣が淹れてくれたお茶を飲んだ後、ジョンの悪魔祓いに移ることにした。

「準備出来ましたです」

「ジョン。頑張つてね」

「ハイです」

屋敷に向かったのは僕その他、ジョン、ぼーさん、原さん、麻衣、ポーラ、アレクで、残りはベースに残った。

二階の奥の部屋に向かいながらも、ぼーさんがすでに三度ほど攻撃を回避していたが、西洋の悪魔には、あまりぼーさんの法力も効かないようだった。

「ここから先は危険ですよ。ボク一人で部屋の中に入らしてもらいます」

「……扉は開けておくぜ」

「よろしゅうたのんます」

ジョンはそう言いながら、いつものように笑った。

扉を開けたまま、カメラを設置した。ぼーさんは、何かあった時のために独鈷杵を握り締めていた。

天にまします我らの父よ。願わくは御名を崇めさせたまえ。

御心の天になるごとく。地にもなさしめたまえ。初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。全てのものは、これによって出来た。できたものの内、一つとしてこれによらないものはなかった。この言は命があった。そして、この命は人の光であった。光は闇の中に輝いている。そして、闇はこれに勝たなかった

ジョンが聖書を読み始めると、家全体が揺れ始めた。

「真砂子。平気？」

「大丈夫ですわ……。ですけど、男の子がとても苦しんでいますわ」

「ジョンが悪魔被いしているから、その影響を受けているんだね」

恐ろしい

どうしたんだい？

悪魔は苦し紛れに、捕らえていた少年を連れて行くこうとしているわ。地獄へと

少年を悪魔にしようとしていると言うのかい？

僕はその言葉を聞いて、少年と悪魔を引き離す必要があると考えた。

ポーラ。悪魔は苦しんでいるのか？

ええ。だけど、消滅する前に少年の霊を地獄へ引きずり込もうとしているみたいですよ

……少年は？

必死に悪魔から逃げようとしています

そこまで聞いて、少年の方から浄霊ができないか考えた。だが、ここで人選を誤るとんでもないことになると思った。

……ポーラ。少年を浄霊できる自信はあるか？

私では恐らく無理です

「原さんは？」

「あたくしでも無理ですわ」

そうなるとう麻衣しかないわけだが、僕は調査の成功と自分のプライドを秤に掛けて、調査の成功を取った。

「麻衣」

「何？」

「少年を浄霊できるか？」

麻衣は先ほどからポォーラや原さんに対して、僕が何を言っていたのか理解しようだった。

「……やってみるよ」

「そうか。なら、麻衣に任せる。原さん。麻衣に付いていて下さい」

「分かりましたわ」

「用心も考えて、一階にいた方がいいかな？」

「麻衣のやりやすいようにやればいい」

モニターで、ジヨンの悪魔被いの様子を見ていたんだけど、一階に設置したカメラに麻衣ちゃんと原さんが映ったわ。

「あれ？　ここ、見て下さい。これって、原さんと谷山さんじゃありませんか？」

「あら、ほんとだわ」

「恐らく、少年の浄霊を試みることにしたのかもしれない」

「悪魔が離れば、自然にどうにかなるもんじゃないの？」

「そこまでは分かりませんが、慌てる様子もなく、原さんと谷山さんだけが一階に移動したのはそう言う理由だと思います」

チーフ。あの少女は、ここでも博士に頼られているんですか？

ピーターがわたしに話し掛けてきたのを横で聞いていた綾子が反応したわ。

バツカね。世の中には適材適所って言葉があるでしょ。彼の両親を浄霊出来た麻衣だったら出来るとナルが判断したんでしょ

……浄霊ぐらいポラにだって出来る

二階に設置してあるカメラではその様子は分かりませんが、彼女は無理だと断ったのかもしれないよ

安原君のフロアで、ピーターはどうにか納得したみたい。

サーモグラフィは、悪魔祓いが行われている部屋だけマイナス値を指していたわ。

すでにジョンの悪魔祓いが始まってから一時間以上が経過。その間、外からは何も起きていない様子がないのに、カメラの中のモニターでは、家全体が揺れ、中の物が飛び交う状態が続いていたの。

その時、一瞬だけ光が見えたような気がしたわ。

まどか！ どうやら谷山さんの浄霊が成功したようです

本当？

家全体の揺れが少し収まっています。それに、飛び交っていた物も動かなくなりました

じゃあ、あの現象は少年霊が苦しんで起こしたポルターガイストってことなのかしら

恐らくそうでしょうね

信じられないわ！ あの日本の子、アレクサンドルの霊を浄化したわ

まさか……

アレクも見たでしょう。今の光を。それに、揺れも収まったわ

麻衣はどうやら浄霊に成功したらしい。

部屋から出ないように結界を張っているぼーさんは、かなりの気を消耗しているようだった。

聖書を読み続けるジョンの方も佳境に入ってきたようだった。

上から来る者は、全てのものの上にある。地から来る者は、地に属する者であって、地のことを語る。天から来る者は、全てのものの上にある。彼はその見たところ、聞いたところを明かし

ているが、誰もその証を受け入れない。しかし、その証を受け入れる者は、神がまことであることを、確かに認めたのである。神がおつかわしになつた方は、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。父は御子を愛して、万物をその手にお与えになつた。御子を信じる者は永遠の命を持つ。御子に従わない者は、命に預かることがないばかりか、神の怒りがその上に留まるのである

その時、ジョンの頭上にシャンデリアが落ちてきた。ぼーさんが部屋に入って、ジョンを引き寄せるのと同時に、僕はPKを使ってシャンデリアを壊した。

「ジョン。大丈夫か？」

「すんまへん。せやけど、渋谷さんが……」

「僕は大丈夫だ。その証拠に余り、壊れていないだろう」

飛び散る危険性も考えて、シャンデリアの位置をずらしたただけだったからな。

音に気付いて、麻衣と原さんが慌てて二階に来た。

「今の音、何だったの？」

「ジョンの上にシャンデリアが落ちたんだ」

「ケガは？」

「平気です。心配ありません」

「ポーラと原さんの二人が部屋の中や屋敷の中を見ていた。」

「悪魔の気配は消えましたわ」

成功したのよ。ジョンの悪魔被いが、成功したわ！

とりあえずもう一日、様子を見るためにカメラをそのままにしておくことにした。

二日後。僕らは空港にいた。

「何だか残念だわ。もうちょっと麻衣ちゃんと一緒にいたかったのに」

「すみません。学校があるので、これ以上は休めないんです」

……麻衣って言ったかしら？ あなたののおかげで、今回の調査は上手くいったわ。ありがとう

ポーラがお礼を言っていたが、麻衣はほとんど理解していないようだった。

「ところでまどか、アレクについてなんだが、やはり、名前が同じと言う理由で襲われなかったのか？」

「そのことなんだけどね。実はアレクって、あのアンダーソン夫妻の妻の弟ってのがいたでしょ。彼の子孫だったみたいなのよね」

「それで、建物内に入ったアレクだけ攻撃されなかったと言うわけか」

「多分そうでしょうね。それに、麻衣ちゃんの話だと、玄関口で侵入者を排除していたのはアンダーソン夫妻の霊みたい」

こうして僕らのイギリス調査は終了した。

日本に戻って数日後。麻衣の推薦試験はどうにか合格できたらしいが、今回の調査で冬休みの補修が決定したらしい。

「調査が冬休み中だったら、補修がなかったのにー」

今回の調査は僕のせいではない。麻衣もまどかには文句が言い辛いのか、大量の課題を仕事の合間にこなしていた。

(後書き)

幽霊に悪魔が憑いたままってこと、あるんでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0224v/>

クレメンスの館

2011年8月4日03時21分発行